

《第 475 回 (2020 年 10 月 8 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：9 人 文書参加：1 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階研修室

### 『北欧神話』 P.コラム/作, 尾崎 義/訳 岩波書店

北欧神話は、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、アイスランドで語り伝えられてきた神話で、『エッダ』という歌謡集と『スノッリのエッダ』という書物を元に作られています。物語では、神々の父オージンや、雷の神である力自慢のトール、良いことも悪いこともするローキ、光り輝くリンゴの木を世話するイズーナといった神々だけでなく、巨人族やこびとたちなど、個性豊かな登場人物たちが活躍します。

さて、この神話に登場する神々からは、どこか俗っぽさや人間らしさを感じられます。輝くリンゴがないと若さを保つことができなかつたり、神々が持つ武器や宝物も、こびとに作ってもらったものだったり、「万能」とは程遠いのです。さらに最後には、神々と対等な存在である「巨人族」との戦いによって両者相討ちとなり、神と巨人が共に滅んでしまうという、過酷で容赦のない結末が待っています。北欧の厳しい自然環境が反映されているのでしょうか。

また、北欧神話に登場する物語や神々の中には、アニメやゲーム、映画などのモチーフとして使われているものが沢山あります。時代を問わず多くの作家の想像力を刺激し、世界中で様々な作品の原案になっていることに、北欧神話の影響力の大きさを感ずることもできました。

次に、読書会に参加された方の感想をご紹介します。

- 北欧はあこがれの国。色々な神様が登場して、常識で考えるとおかしいところもあるけど、発想が面白いと思う。内容には、旧約聖書と通じるところがある。ローキは、憎めない神様。長いので、何回も読めるような本ではない。
- 子育ての難しさ、想像力のすばらしさを感じた。この神話が、北欧文学、ヨーロッパ文学の土台になっている。そういう観点で向き合った時、身を入れて読むことができた。朗読をすると、体の中にリズムが入ってくるのかな。
- 登場人物の相関図が欲しかった。何もないところから世界を作ったのではなく、

そもそも出来上がった集団がある。善と悪に分かれているのではなく、ローキのような神もいる。神話らしくなくて、衝撃だった。

- 『物語北欧神話』(原書房)と一緒に読んだ。オージンは、右目と引き換えに知恵を手に入れたのに、戦争を止めることができなかつた。知恵とは一体何なのか。光り輝くリンゴのエピソードは、アダムとイブの物語を想起させる。

- 血なまぐさい、戦いと略奪の話で、お話として面白く読んだ。神々の紹介がもっと欲しかった。登場する神々は体育会系で、知恵があっても有意義に使うことができていない。運命は決まっている、というのが独特だと思った。

- 神話を初めて読んだ。色んな神様が出てきて、その他の登場人物も多い。頭がいっぱいになってしまったので、人物相関図が欲しかった。数か所に出てくる挿絵が独特。1回読んだだけでは良さが分からなかつた。

- 北欧の国に興味があるが、北欧神話の「北欧」にはフィンランドが入っていないということに驚いた。神様たるもの、いつも力がみなぎっていきそうなのに、イズーナの光り輝くリンゴがないと若さを保てないなんて。

- 今まで、北欧神話にはなじみがなかつた。生肉を食べられないなどのエピソードを読むと、人間らしい神様だなと思った。神様たちは、私利私欲というか、自分の正義のために戦っているように感じる。

- ヴァルキリアの話と、フレイヤの話が気に入った。強く美しく清らかなヴァルキリアには想像を掻き立てられた。フレイヤの話では、首飾りを手に入れた代償に夫を失い、自分が悪かつたという印としてその首飾りをかけているのにゾッとする。

次回 11月12日(木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□ 『星の王子さま』 サン=テグジュペリ/作, 内藤 濯/訳 岩波書店

□ 『星の王子さま 新訳』 アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリ/作,  
倉橋 由美子/訳 宝島社